
いつまでも、君は笑う

若宮櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつまでも、君は笑う

【Nコード】

N0672H

【作者名】

若宮櫻

【あらすじ】

氷上裕介と柊裕子の小さな話。裕介のクラスに転校してきた柊。破天荒な彼女に振り回されながらも、彼は今までにない充足感を味わっていた。

(前書き)

明るい話ではありませんので、あしからず

その日、君はやってくる

彼女が転校してきたのは、春の終わり。中学3年になったばかりの頃だ。

朝のホームルーム。担任の後ろについて教室に入ってきた。背中を覆う長い髪を揺らして、顔には笑顔をたたえ颯爽としている。女子の転校に男子生徒が興味を持つのを、客観的に見ていた。

時期外れの転校生だからといって、俺にはどうでも良かった。単にクラスメイトが一人増えるだけだ。かつたるい日々、変化は無い。『柘裕子』と、担任の女教諭、川崎が黒板に書く。

「転校生の、柘裕子さん。柘さん、自己紹介してくれる？」

担任の言葉に、彼女が一歩進み出る。

「初めまして、柘裕子です。変なタイミングの転校だけど、問題を起こしたわけじゃないから安心してね。この学校で、たくさん友だちを作る気にいるから、よろしく！」

冗談交じりの自己紹介にクラスメイトは笑い、彼女・・・柊は早々にも受け入れられていた。

「氷上！ お前の隣りだから、柊さん頼むよ？」

川崎が、唐突に俺を指す。

確かに俺の名前は氷上裕介で、名前がそのまま席順になっているから柊は俺の隣りになるわけだ。

他に「ひ」で始まる苗字の奴は居ない。

川崎が指で指していたから分かるだろうが、一応は席が分る様に手を上げる。

窓際が一番後ろだ。

柊は席の間を抜けて辿り着くと、まずは俺に向かって笑った。

「よろしくね」

「ああ」

ぱんと手を叩いて担任は、柊に集まっていたクラスの視線を、自分へと向ける。

「ちょっと延びたけど、3年生最初の委員長を決めたいと思う。現委員長と副委員長の二人、出てきて」

本当は一学期が始まって直ぐ決めるはずだったが、クラスメイトの数人が風邪で休んだので、全員揃うまでと延期されていた。前に委員長の男子と、副委員長の女子が出る。

「えっと、じゃあ自己推薦で。やりたい人はいますか？」

まずは、立候補を募る。が、誰も手を挙げない。

クラス委員長なんて、「長」が付いても雑用と変わりない。誰もがそんな面倒な事をやりたいと言いださないさ。

「はい！ 私、やりたい！」

思わぬ所から声と手があがる。俺の右隣だ。
つまり……

「柊さん？ けど君は、転校してきたばかりだし……」

現委員長が戸惑い、担任も驚いている。
まだクラスメイトの名前も知らないはずの柊が手を上げたのだ。無茶過ぎる。

「でも、委員長をやれば、みんなと関わるチャンスも増えるわけだし、直ぐ溶け込めるかなと思って。それに、他にやりたい人がいないなら、良いでしょ」

「で、でも……」

戸惑う委員長に同情する。

柊の無謀さに呆れてため息をついた。

「ならば、」

瞬間、肩を叩かれる。痛いくらいだ。

「彼を副委員長に推薦する！ 補助がいるなら、大丈夫でしょ？」

右耳から入ってくる言葉の意味を、取りこぼしそうになる。

慌てて肩に置かれた手の持ち主を見ると、まるでもう決まったかの

様に嬉しそうに笑っている。

「・・・氷上がいるならさ、大丈夫じゃねえの？」

「他にやる人もいないしね・・・」

「別に誰でも良いよお？」

教室の所々から声上がる。

「は、はあ!？」

「氷上以外に、立候補と推薦をする人ー？」

委員長が問うと、教室がシーンと静まり返った。

「決定、だな。まあ、頑張れよ氷上」

担任は無情に言い渡す。

一瞬にして決まってしまう、委員長は柊、副委員長は俺という事になってしまった。

基本は仲の良いクラスだ。調子に乗ればそのまま進んで行く。覆すのは無理な様だ。

俺は脱力して机に突っ伏した。

「よろしくね」

笑顔で柊が覗き込んでくる。

この時、この笑顔は無敵なんじゃないかと、思い始めていた。

少々脱力気味で授業を受け、放課後。

副委員長なのだから、と担任に言われ、柘に校内案内をする事になった。

「この学校ってさ、あんまり大きくないけど、ちょっと入り組んでいるよねえ」

「結構古いからな。建て増したり、修繕したりでこんなんになったんだよ」

何となくの会話をしながら、廊下を歩く。

なぜ俺がと嘆くが、それは、副委員長になってしまったからなのだ。

「ったく、もう良い。こつちだ！」

行こうとした廊下を止め、階段を登る。

その先は、学年の教室ではなく、放送室や写真部等の文化系の部室がある階だ。

一番右端の扉を、断りも無く開けた。

「ちょっと、ノックくらいしろよお。失礼します、とかさあ〜」

入ってきたのが俺だと分った瞬間、文句を言われた。

部屋の中には対面したソファがあり、事務机が幾つか並び、真正面の大きな椅子には男子生徒が座っていた。

この中学の現生徒会長。つまりここは生徒会室だ。

そしてコイツは、俺の幼馴染でもある。同じ学年で隣りのクラスの

信悟。

「悪い、あれ欲しいんだけど。あの・・・新生に配ったヤツ」

「その棚。・・・でもなんでさ？ 裕介にあんなもの必要ないだろう」

「俺は必要なくても、彼女は必要なんだよ」

言いながら示された棚を漁る。俺が体をずらした事でやっと幼馴染は柎に気付いた。

ふざけてはいるが一応は生徒会長だ。転校生の話くらい聞いているだろう。柎の顔を見て納得したようだ。

俺は漁る手を止め、目的の物を引っ張り出す。

「はいよ」

幾つかの書類であるそれを柎に渡した。

「・・・これは？」

「こつちが入学案内で、これが校内地図。それとこれが部活のリストと委員会のリスト」

ちゃんと文書になっているものがあるのだから、それを見せた方が早いと思ったのだ。

一タ口で説明するなんて面倒、と思った時に、2週間前の入学式で新3年生としてその文書を配った事を思い出したのだ。

「さて、これでとりあえずの仕事は終わったな」

柎は、ぱらぱらと受け取った書類を見て顔を上げた。

「ありがとう。助かった」

ちやんと案内しろと怒るかと思えば、充分だったらしい。それから数日、柊は校内地図を片手に廊下を歩いていた。

時にはクラスメイトに、下級生でも気にせず教室の場所や部活の内容、学校の事を聞いていた。

そして地図を持たなくなった頃、委員長の初仕事があり、副委員長として俺も借り出される。

そんな忙しい中学生を送る気は、さらさら無かったのだが……。

それは無敵の笑顔

時間は放課後。

生徒の居なくなった教室の一つに、俺たちは集まっていた。同じ3年のクラス委員は全員。

定期の委員会議だ。

「さて、今年もこの季節になりました。各委員たちは準備に入ってください」

生徒会長の信悟が、俺の前にいる時よりは真面目な口調で喋り始めた。

「お知らせ用のプリントはこれです。これをコピーしてクラスに配ってください」

数週間後、この中学では恒例のマラソン大会が行われる。

生徒の体力向上の為、という名目だが最初は、目標無しに体育の授業を行うよりも、メリハリをつけた方が良く、生徒のやる気を上させる為に始まったのだ。

「・・・今年もめんどくせえな」

独り言のつもりで小さく呟いた。

それが僅かに届いてしまったようで、隣に座っていた柊がこちらを向いた。

「マラソン、嫌い？」

「別に・・・嫌いじゃないけど。秋もやるんだぜ？ もう充分に走ったさ」

そう、初夏に行われ、秋の終わりにも行われる。つまり、年2回だ。3年もこの中学に通い、何回もやれば飽きてくるというものだ。

「そっか・・・もしかしたら、他の人達も同じかもね」

気持ちがかか？ 言葉にはしていない。目で問いかけた。すると、柊はにこりと笑う。

それは、副委員長に決められた瞬間を思い出させた。

「はい！ 提案があるのですが」

柊は真つ直ぐに手を上げていた。

この学校に来たばかりの転校生だと知っている他の委員たちは、何を言い出すのかと興味津々だ。

「どうぞ、なんですか？」

生徒会長が座って聞きにまわると、柊は席を立ち上がった。

「このマラソン大会は、恒例になっているようですね。私は初参加になるので、こういうものなのかはよく知りませんが、そろそろ参加を嫌がる人が出ているのではないですか？」

俺の愚痴を真に受けた柊だが、その彼女の言葉は他の委員たちの図星を突いていたようだ。

「“仮装”マラソン大会というのはどうでしょう!」

唐突で、そして突拍子も無い彼女の言葉に、俺は頭を抱えた。教室中が唖然としている。

「仮装の衣装は生徒が作って、それを着ながら走るんです。名目は家庭科成績の向上と生徒の体力向上。それなら、先生方も賛成してくれると思うんです」

笑いかけるが、他の者は黙り込んでいる。

誰もこの話に乗ってこないかもしれない。そうすればこのまま終わる。

しかし、一人が声を発した。

「それってちょっと、面白いかもね」

よりもよって生徒会長の信悟だ。一人が賛成すれば、他も続く。

クラスメイト同様、調子に乗った彼らを止める術を、俺は持っていなかった。

ただでさえめんどくさいマラソン大会が、大きなものになってしまっ
う予感。

やったあ！ と、笑いながら俺にピースをする柊。

彼女の笑顔は無敵だ。絶対。

数日後、仮装マラソン大会は、正式に決定された。

「さあ、これからが忙しくなるよ！」
「なんでそんなに元気なんだ・・・」

拳を突き上げ、楽しそうな柊とは反対に、俺は肩を落とした。
もう少し、教師陣が渋るかと思っただが、やけにあっさりと許可されてしまったからだ。

どうやら、教師も面白がっているようだ。

クラスメイトたちの反応は予想が出来る。委員会議での事を見ていたからだ。

その予想は外れず、みんな大いに盛り上がった。

単なるマラソンだったものに“仮装”が付いた。だから準備は倍以上に大変になってしまった。

体育の授業の時は、マラソンの練習。

家庭科の授業の時は、仮装の衣装作り。

走るには生徒全員が走るが、衣装を全員分作りきるのは無理と判断し、クラスの数名が仮装担当という事で決まった。

入学したばかりの1年生は不利かと思えたが、そこはまたも柊が発案し、1年生に仮装の出来映えを評価させる事になったのだ。

賞品が出なくとも、クラス対抗という事で、俄然生徒は燃えてきた。となれば俺も柊も忙しい。

授業には一緒に参加し、マラソンの練習もするし、衣装の制作も手伝う。

放課後はマラソンのコースを決めたり、1年生からの評価をどうするか、生徒の保護者を招く事になってしまい、その対応や整理をどうするか、やらなければならぬ事はたくさんあった。

大変だったのは確かだ。

だが、他人に多くを求めない柊は、俺以上に働き、動き、そして笑顔だった。

「ああ……楽しかったあ」

柊が俺の隣りで伸びをする。

仮装マラソン大会は無事終了。

走者では勝ちを逃したが、仮装では、大規模な張りぼてまで作ったウチのクラスが優勝だった。

「……氷上くんは、楽しかった？」

いつもにこにこしている柊と違って、俺はいつも無表情というか、あまり感情を表に出さない。

だから、不満を持っているのではないかと心配してくれたのだ。

ここで、つまらなかつた。と言ってやりたい気持ちもある、しかしそれでは嘘をつく事になる。

「まあ……そこそこな」

忙しくて、駆け回っていたわりには楽しかったのだ。

クラスメイトが笑う。教師が笑う。保護者が笑う。

柊が笑う。

彼女はもう、完全にこの学校に溶け込んでいた。

「さて、今度は何をしようかなあ」

「は!?! また何かやらかすつもりか!?!」

「うん、だって私、楽しい事をする為にこの学校に来たんだもん」

彼女の、あまりのパワフルさに脱力するのは何回目だろう。

「ったく・・・勘弁しろよ・・・」

「ふふふ、そう言いながらも、氷上くんは手伝ってくれるものね。何気に有能だし」

「何気に、は余計だよ」

彼女を止めるなんて無理なのだ。むしろ、止めようとする方が疲れる。

なら、さっさと諦めてしまえば良い。

諦めてしまったほうが、楽しい。

「・・・今度はもう少し小規模にしろよ」

「ほおら、やっぱり手伝ってくれる」

くすくすと柊は笑った。

最初の大仕事の後は、少しの平穏があった。

久しぶりに部室へと顔を出す。が、そこには誰も居ず、シーンとし

ていた。

けど俺はこの空間が嫌いではない。

適当な椅子に座ると、愛機を磨き始めた。

しばらくした頃、廊下を走るばたばたという音が聞こえた。直ぐに扉は開かれ、柊が全身で息をしている。

「はあ、はあ・・・こ、ここにいた・・・!」

どうやら俺を探していたらしい。

しかし、俺の手元を見て表情を変える。教室を見回して、感嘆の声をあげた。

「すご・・・え、氷上くん、写真部だったの?」

そこには部員たちの撮った写真が飾られていた。

「まあ・・・な」

少し照れくさい。写真を撮っている事を、あまり人に言っていないからだ。

写真部部員も少ないし、多分、クラスメイトも殆ど知らない。

「それが、氷上くんの?」

柊さんが近寄ってきて、俺が今さっきまで磨いていたカメラに目を落とす。

フィルム式の、古い一眼レフ。父親からもらった物だった。

「・・・古臭いって・・・嗤っても、良いぞ。今はみんなデジカメだからな」

馬鹿にされても構わない。ちょっと悔しいがこのカメラが古いのは、
本当の事だ。でも俺は、このカメラが好きだった。

「嗤ったりしないよ、そのカメラが好きなんでしょう？」
「……」

見透かす彼女の微笑みが、心地よかった。

柘は壁に掛けてある写真の中に、俺の名前を見つけると、しげしげ
と眺めた。

ふと数歩離れて、俺の方を向く。

「撮って」

「は？」

「だから、撮って！」

私を！ と、柘がピースをしながらアピールする。

戸惑いながらも、満面の笑顔に思わずシャッターを切る。

無意識の様な行動に、どんな写真を撮ったか自分でも分らなかった。
撮らなければいけない気がして、良く見ずに撮ってしまった。

デジカメではないから、直ぐに確認する事も出来ない。

「それってさ、いつ現像出来るの？」

「え、あ、ああ……まだフィルムが残ってるから、それが終わっ
てからな」

今すぐ現像したい気もしたが、残りのフィルムがもつたいない。ま
だ数枚しか撮っていないのだ。

「現像したら見せて……って、ああっ！ー！」

「な、なんだよ急に」

柗の突然の叫びに驚いた。すごく慌てた様子だ。

「ああもう、なんで先に言ってくれないのよ、損したじゃない！」

何の事かさっぱり分からないが、その言葉は、俺に向けられているようだ。

「写真だよ、写真！ 早く言ってくれば氷上くんに頼めたのにい
」

「・・・頼むって、何をだ？ 柗」

「みんなの写真！ この前のマラソン大会の時だよ。折角のイベントだったんだから、しっかりと写真に撮っておけば良かったな、って。親御さんたちが個人で撮ってはいたけどさ、学校側は何も記録してなかったんだもん、もったいないよ！」

確かに、あれだけ大きくイベントになったのだから、写真を残せば卒業アルバムには役立つだろう。
しかし雲行きが怪しい。

「ね、これからのイベント、氷上くんが撮ってくれない？」

「嫌だ」

即答する。

人を撮るのはあまり好きではない。人を撮れば、撮った写真を見せて欲しいと言われるからだ。自分の撮ったものを見られるのは、なかなか恥ずかしい。

「私の事は撮ってくれたじゃない。折角の記念なんだよ？ 良いシ

「ヤッターチャンスがたくさん有るかもしれないよ？」
「っ……っ」

「シャッターチャンスは魅力的だ。実を言えば、この前のマラソン大会も、撮りたいと思う瞬間が幾つかあった。」

「ね！」

柊が擦り寄る。

「……」

不満顔をしながらも、頷く自分に気が付いた。

「あっ、と思う時には遅い。」

「委員会会議が始まるからねえ」

俺を探していた理由を告げると、柊は笑顔で次の仕事に駆け出した。ほだされたわけでも、誘惑に負けたからでもない。単に……“記念”という言葉に、賛同しただけだ。

その後、柁はたくさん行事を考える度に教師や生徒会長に提案し、時にはクラスで、時には学校全体で、様々に盛り上げていった。

夏になったら、プールで競泳。夏休み中にクラスの合宿を計画し、学校全体を使つての肝試し大会となった。

クラスだけではなく、学年、更には下級生とまで友人関係を増やしていった柁は、一も二も無く二学期も委員長となり、俺もそれに付き合う形となる。

秋は、文化祭はもちろんのこと、栗拾いやら焼き芋やら、秋の仮装マラソン大会までちゃんと行った。

それに伴い、写真は増えていく。

副委員長としての役目を全うしながらも、カメラ係と決められた俺は、初めはカメラを扱えると知って驚かれたが、今ではそれが当たり前で定着するほどになっている。

忙し過ぎて撮るばかりで、現像が出来ないほどだった。

フィルムは溜まり、柁との約束の写真も、まだ現像できないでいた。

そんなある時だ。

冬の初め。寒さがきつくなつた頃、また行事を行おうと動いていた柁が、倒れた。

俺の隣りでふらりと崩れ落ちたのだ。

慌てて保健室へ運ぶと、軽い風邪だという。

安心したのもつかの間。やけに慌てた様子で、柁の親が揃って学校へ駆け込んできたからだ。

そのまま両親に連れられ、病院へ。

入院したと、担任から聞いた。

突然の事で、俺も学校も皆が驚いていた。

いつまでも、君は笑う

柊の所へ見舞いに行ったのは、入院から一週間後だった。
軽い風邪だと聞いていたから、直ぐに退院してくると思ったから。
待っても出てこないものだから、心配半分と急かし半分で。

大人数で押しかける迷惑を考え、代表として俺が一人で向かった。
市内の大学病院だ。学校が終わってから行っても、時間に余裕がある。

訪れた入院先。一人部屋だと聞いて、音量を気にせず出来るだけ明るい声で扉を開けた。

「よお」

冬の夜は早い。少し翳り始めた空が、病室の窓から見えていた。
物悲しい気持ちになる。

それを打ち消すように、柊はまた、笑顔だった。

「氷上くん？ わあ、お見舞いに来てくれたの？ 嬉しいなあ」

心底嬉しそうに、はしゃいでいる。頬は上気して、元気そうに見えた。

「これ、一応お見舞い。クラスのみんなと、他のクラスの奴らと、信悟から」

気遣いながら持ってきた花束を差し出す。

冬でも買える花を出来るだけたくさん、色々な種類を選んできたのだ。

受け取ると、嬉しそうに柊は微笑む。

「ありがとう」

その姿、表情を見て、どこも悪い様には見えない。素直に問いかけた。

「柊、いつ退院できるんだ？ お前みたいに元気そうだと、病院も早く出て行って言うだろう」

軽口だった。

10ヶ月以上、毎日顔を合わせ、傍らにいたのだ。どんな答えが返ってくるのか、予想はついていた。

しかし、それを柊は簡単に裏切るのだ。

「私ね……もう、学校へは行けないの」

「……え……？」

瞠目する。

良く・・・理解できなかった。

氷上君には言っておくね、そう微笑みを湛えたまま、言い聞かせる様に柊は語る。

「私はもう退院できないの。今まで黙っていてごめんね」

「・・・どこ・・・が？」

やっと動き出した頭で呟く。

「1111」

そう言っただけで彼女が手で触れたのは、自分の胸。

それがちょうど心臓の部分だという事に、俺が気付いたのを見て柊は頷く。

「自分の余命は分っていたし、覚悟も出来ていた。でも何かしたかったの」

柊は窓の外に顔を向けながら、ぽつぽつと話し出す。

俺は何もいう事が出来なかったが、見えない柊の表情を、ずっと見たいと思っていた。

「氷上くんは知ってる？ 人ってね、2回死ぬんだって。1回目は体が死んだ時。2回目は・・・人から忘れられた時、記憶の死なんだって」

知っているかと聞かれたら、知らないとしか答えられない。首を振ったら、見てもいないのに心配で分ったようだ。

「私はね、自分を遣したかったの。他の誰かの記憶の中に。そうすれば私は死なないわ。誰かが覚えていてくれる限り、生きていられる」

思わず頷いた。これも、気配で分ったようだ。

「それで、遣すなら笑顔が良いと思った。誰かが私を思い出すたび、記憶の中の私は笑顔なの。楽しそうに、嬉しそうに、いつも笑ってる」

もしかしたら彼女は、今まで無理をして笑っていた事もあるのかも
しれない。

余命は迫り、死の宣告に怯え、それでも周りに悟られない様に明るく振舞った。

それが良い事なのか、悪いことなのか分らない。
けど、それが、彼女の想いなのだ。

真実は彼女しか知らない。俺の考えは推測に過ぎないんだ。
同情じゃない。ただ、柊に賛同した。

「・・・素敵だと思っ」

“素敵”なんて、初めて口にした言葉だった。

やっと、柊はこちらを向いて嬉しそう笑った。

彼女の笑顔は、全てが真実だったと、俺は信じたい。

その3日後、二度目の見舞いに行く前に、訃報が届いた。
享年15歳。
ちょうど、約束の写真を現像した日だった。

葬式は参列を望む生徒が多く、たくさんの人が柩に別れを告げた。
棺の前には献花台が設けられ、白い花々で溢れている。

棺の奥、壇の上には、彼女の遺影。引き伸ばされた、約束の写真だった。

少し照れくさそうに、満面の笑みが映っている。

ご両親が使わせて欲しい、と頼み込んできたほどに良く撮れていた。

棺に近寄り、その顔を見つめる。

安らかな顔は、笑っているように見えた。きっとそれは錯覚じゃない。

彼女の想いは成ったのだ。

式場にも、悲しみ、涙を流す人はいる。俺自身も、昨日までは相当泣いた。

しかし、生前を思い出し、話を始めるとどこからともなく笑いが零れる。

記憶の中での彼女は、いつも楽しそうに笑っている。
笑顔しか、思い出せない。

君は生きていた。証拠はある。たくさんの写真の中に、君が幸せに生きていた証がある。

そして、君はまだ生きている。

俺たちが死ぬまで、一緒の時間を過ごすのだ。

心の中で、記憶の中で……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0672h/>

いつまでも、君は笑う

2011年1月25日03時47分発行